

令和5年度 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
(分担) 研究報告書

〈就労アセスメントアプリ〉入力項目候補の妥当性確認-聞き取り調査より

研究代表者 丸谷美紀 国立保健医療科学院

研究分担者 川尻洋美 群馬大学医学部附属病院

研究分担者 高井ゆかり 群馬県立県民健康科学大学

本研究の目的は、障害者本人の状態の波と支援環境を突合させて経過をモニタリングするための〈就労アセスメントアプリ〉入力項目候補の妥当性を確認することである。

就労支援の経験を5年以上有し、かつ「障害者本人の状態の波と支援環境を調整し、本人の能力を後押しする適切な就労の選択支援」ができている支援者27名、及び障害者11名に、「障害者本人の状態の波を考慮して就労環境を調整するために、モニタリングが必要な項目」について聞き取り調査した。

アプリ入力項目候補への意見は、個別性に即した細項目が必要、と集約された。アプリ全体への意見は、評価者のためのアプリではなく「自分のため」と感じられること、「継続しやすい機能」が前提として得られた。また、その人なりの評価基準を決める、言葉の評価より5段階などの線で示す、モニタリング頻度と期間、他のアプリとの連動等の意見が得られた。

最終的に本アプリの入力項目の構造は、生活行動、気持ち体調、環境に分類され、3つが紐づく構造は、障害者の置かれている状況を相互に関連しあい複合的に作用しあうものという点でバイオ・サイコ・ソーシャル・モデルの考え方と合致する。

本アプリの目的から〈就労アセスメントアプリ〉という名称よりも〈就労生活モニタリングアプリ〉が妥当とも考える。今後は得られた意見を基にアプリを試用し改善していく。

A. 研究目的

障害者の就労において、障害者本人の状態の波（身体面・心理面の良好な時期と不調な時期の変調）があることでアセスメントが難しくなっており、その結果、波に応じた就労環境の調整が困難となっている（日陰七重 & 鈴木純恵, 2008）（岩本友規 & イワモトユウキ, 2020）。より障害者本人の力を活かすために、障害者本人の状態の波と支援環境（物理的・人的支援状況等）を突合させてモニタリ

ングし、可視化する必要がある。可視化した結果を、関係機関等との情報共有することで、状態の波に合わせた環境調整が可能となる。

現在、障害者本人の状態をアセスメントする実用的なツールは各種存在するが、状態の波をモニタリングするツールは存在しない。また、環境と突合させて支援に生かせるツールもない。医療・介護・健康分野のデジタル化方針の提言後（内閣府, 2014）は、多数のスマートフォンアプリケーション（以下、アプ

リ) が創出され有効性が確認されている (Sullivan & Lachman, 2017)。アプリの有用な機能はセルフモニタリングであり (Szinay et al., 2020)、障害者本人の状態の波と支援環境(物理的・人的支援状況等)を突合させてモニタリングするために有用と考える。現在、国民の8割以上がスマートフォンを使用しており(総務省, 2021)、今後、アプリへの親和性の高い世代が就労支援の対象となることを見据えると、身近な携帯電話で状態を入力できるアプリとして、〈就労アセスメントアプリ〉を開発する事が有用と考えた。

表1. 先行研究を基に整理したアプリ入力項目候補

(文献から整理した) 就労アセスメントアプリの入力項目:生活行動、身体・心理面の症状・環境の状況 ^a									
1. 一日の行動のうちモニタリングが必要な項目 ^b			2. その時の気持ちや体の様子 ^c			3. その時の周りの状況 ^d			
食事 ^e	出来た ^f	出来ない ^f	どちらとも言えない ^f	気持ちの落ち着き ^g	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h	家庭内の動きやすさ ^g	大丈夫 ^h
睡眠 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと不眠 ^h	かなり不眠 ^h	集中力や意欲 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h	家族の理解や協力 ^h	ある ^h
生活リズム(一日のスケジュール) ^h	出来る ^h	出来ない ^h	どちらとも言えない ^h	体の症状 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h	服薬や通院の時間確保 ^h	大丈夫 ^h
清潔や身だしなみ ^h	出来た ^h	出来ない ^h	どちらとも言えない ^h	動きや感覚の制限 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h	通いやすさ ^h	大丈夫 ^h
健康管理 ^h	出来た ^h	出来ない ^h	どちらとも言えない ^h					周りの雰囲気 ^h	大丈夫 ^h
金銭管理 ^h	出来た ^h	出来ない ^h	どちらとも言えない ^h					指示や意思疎通 ^h	大丈夫 ^h
家庭での役割 ^h	あり ^h	なし ^h	どちらとも言えない ^h					作業場の環境 ^h	大丈夫 ^h
通所や運動などの移動 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h					作業場の構造や表示 ^h	大丈夫 ^h
周りの人との意思疎通 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h					道具・機器や家具 ^h	大丈夫 ^h
意思表示 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h					仕事の負担 ^h	大丈夫 ^h
ルールや連絡を守る ^h	出来た ^h	出来ない ^h	かなり辛い ^h					仕事の内容 ^h	大丈夫 ^h
作業 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h					作業の時間や休暇 ^h	大丈夫 ^h
失敗や助言への対応 ^h	大丈夫 ^h	ちょっと辛い ^h	かなり辛い ^h					安全面 ^h	大丈夫 ^h
危険への対処 ^h	出来た ^h	出来ない ^h	どちらとも言えない ^h					友人や地域との関係 ^h	大丈夫 ^h
余暇の過ごし方 ^h	出来た ^h	出来ない ^h	どちらとも言えない ^h						

B. 研究方法

1) 研究期間: 令和5年7月-令和6年1月

2) 研究参加者

i. 募集方法: 質的記述的手法を用いて行うため、研究対象者は機縁法により目的に即した

そこで、まず、アプリ入力項目を国内文献と分担研究者の川尻・川口・臼井・高井の先行研究を基に、アプリの入力項目(本人の状態と物理的・人的支援状況等)の候補を整理した(表1)。次に、整理したアプリ入力項目候補の妥当性を障害者、及び、障害者の就労の支援者に確認する必要がある。

本研究の目的は、障害者本人の状態の波と支援環境を突合させて経過をモニタリングするための〈就労アセスメントアプリ〉入力項目候補の妥当性を確認することである。

対象者を選定した。具体的には研究協力者の榎本・進藤(就労移行支援事業者)より、就労アセスメントを実施する支者・障害者の紹介を受けた。

ii. 選定基準: 調査対象は、「障害者本人の状態の波と支援環境を調整し、本人の能力を後

押しする適切な就労の選択支援」ができている支援者・障害者とした。

3) 調査方法：「障害者本人の状態の波を考慮して就労環境を調整するために、モニタリングが必要な項目」について、(表2)の内容を聞き取り調査した。

性	女性	4
	男性	7
年代	20	4
	30	4
障害種別	40	3
	知的障害	2
	身体障害	3
	発達障害	1
	精神障害	5

表2. 聞き取り調査内容

1. 基本項目
・年代
・資格
・就労支援の経験年数（通算）
・支援した経験がある障害の種別 (精神障害、発達障害、知的障害、身体障害、感覚器、難病、高次脳機能障害など)
・使用した経験のあるアセスメントツールやチェックリスト (就労支援のためのアセスメントシート、職場適応促進のためのトータルパッケージ(TP)、ワークサンプル幕張版(MWS)、幕張版ストレス・疲労アセスメントシート(MSFAS)、難病のある人の就労支援活用ガイド等)
2. アプリに関する事柄
・就労支援にあたり、将来継続して就労することを見据えて、アセスメントで重視している事柄を、具体的な例も交えてお聞かせください。
・アセスメントをする際に、障害者の方の心身の波をどのように把握されていますか。また、その波を補うために、どのように家庭環境や就労環境を整えていますか。
・心身の波を把握し、波を補うツールとしてアプリ開発を考えています。文献から整理した別表の項目について、ご意見をお聞かせください。

4) 分析方法：逐語録を作成し、質的記述的にアプリ入力項目候補への意見、及び、アプリ全体への意見を抽出した。

(倫理面への配慮) 国立保健医療科学院倫理審査委員会の承認を得た（承認番号NIPH-IBRA # 23002）。

C. 研究結果

1. 調査対象者：

・障害者：下記の11名であった（障害種別は重複回答）。

・支援者：下記の27名であった。

経験年数	平均 8.71 年	
担当した障害種別	知的障がい	
	身体障害	
	発達障害	
	精神障がい	
	難病	
	高次脳機能障害	
属所	就労移行支援事業所	20
	障害者就業・生活支援センター	7
保有する資格（重複）	精神福祉士	13
	介護福祉士	7
	精神保健福祉士	5
	公認心理師	4
	ジョブコーチ	2
	保健師	1
	福祉用具専門相談員	1
	福祉住環境コーディネーター	1
	教員免許状	1
	児童指導員	1
	ケアマネジャー	1
	産業カウンセラー	1
	キャリアコンサルタント	1
	タクティールケア	1
	ワークサンプル幕張版	6
	MSFAS	4
	職業準備性のピラミッド	3
活用しているツールなど（重複）	Kstep	3
	就労パスポート	3
	就労支援チェックリスト	2
	就労支援のためのアセスメントシート	1
	COPM	1
	ACT	1
	マイノート（東京都作）	1
	BWAP2	1
	事業所独自のツール	14
	自作のツール	2
	特になし	1

注) 1名のみ精神障害者に特化していたが、26名は知的・精神・身体・発達障害・難病・高次脳機能障害を担当した経験があった

2. 分析結果

1) アプリ入力項目候補への意見

生活行動、気持ち体調、環境、それぞれに対する意見を表3に示す。種々の意見を得る

ことができ、個別性に即した細項目が必要となる、と集約される。

表3 アプリ入力項目候補への意見

大分類	小項目	意見の集約
生活行動	食事	食事の支度も含める
		食事療法が必要な方は守れているか尋ねる
		栄養バランスも尋ねる
	睡眠	熟睡感など睡眠の質を尋ねる
		過眠気味でないか・睡眠時間も尋ねる
		不要な昼寝をしていないか尋ねる
		昼夜逆転がわかるように時刻を尋ねる
		中途覚醒の頻度を尋ねる
	生活リズム（一日のスケジュール）	何時ぐらいから体や頭が動き始めるか尋ねる
		規則正しいスケジュール通りの行動を尋ねる
		スケジュールに具体的な時間を入れる（夜12時前に寝るなど）
	清潔や身だしなみ	入浴やシャワーや洗濯などの下位項目を尋ねる
		衣類を生活に保っているか尋ねる
		歯磨きなどの衛生面を尋ねる
		場に合った化粧や髭剃りなどを尋ねる
	健康管理	服薬など具体的な項目を尋ねる
	金銭管理	電子マネーやクレジットなども尋ねる
	家庭での役割	家庭で掃除などの下位項目または自由記述で尋ねる
	通所や通勤などの移動	人ごみや慣れていない場所への移動ができるか尋ねる
	意思表示	「困ったときに頼める」「断る」など具体的な項目を尋ねる
		言語、ツール、サイン、動作など方法は問わずとするか
		コミュニケーションは家族と職場を分けて尋ねる
	失敗や助言への対応	失敗の報告と助言を分けて尋ねる
		メモを取るなど具体を尋ねる
	危険への対処	物理的か心理的なものか危険の定義を示して尋ねる
	余暇の過ごし方	地域とのつながりやサークルを尋ねる
		運動をしているか尋ねる
	他	(月経周期など)本人と支援者にしかわからないマークなどを入れて尋ねる
		自由記述を追加
気持ち 体調	気持ちの落ち着き	焦りなどの気持ちの下位項目を尋ねる
		言葉が出ない思考が止まるなどの下位項目を尋ねる
		気持ちの項目は少ない方が選択に悩まない
	体の症状	何時ごろからなら動きやすいなど体調の下位項目を尋ねる
環境	服薬や通院の時間確保	仕事中の服薬の時間、通院の休みが取れる、が分かるように尋ねる
	周りの雰囲気	職場での人間関係が分かるように尋ねる
	仕事の負担	仕事の負担は我慢できない程度など分かるように尋ねる
		仕事の満足度を尋ねる
		今後の展望や希望を尋ねる

作業の時間や休暇	作業時間と休憩時間を分けを尋ねる 休憩スペースを尋ねる
作業場の環境	物理的な環境と人的な環境を分けて尋ねる 作業場の環境を温度も含めて尋ねる
作業場の構造や表示	構造や表示はマニュアルや指示を含めて尋ねる
安全面	環境の安全面は心の面か身体の面か分けて尋ねる
友人や地域との関係	家庭内や地域での余暇の過ごし方は詳細に尋ねる
友人や地域との関係	地域のサポートは就労継続のカギとなるため尋ねる 地域のサークルなどを尋ねる 友人や地域との関係は関係性の有無か継続か分けて尋ねる 余暇の時間、余暇の過ごし方、友人との関係性を分けて尋ねる 仕事の負担で仕事以外のことができないのか理由を尋ねる 社会のニュースの影響を尋ねる
	全体に「家庭」と「仕事」を分けて尋ねる 「その日何があったのか」も尋ねて症状と紐づける
その他	一口コメントを入れる
全体に	

2) アプリ全体への意見

前提、項目と構造、自己評価基準等に対する意見を表4に示す。

- ・前提：評価者のためのアプリではなく「自分のため」と感じられること、また「継続しやすい機能」とするといった意見であった。
- ・項目と構造：項目数を絞る、自由記述を入れる、大項目のうち入力が抜けていても記録できる、行動・心身・環境の構造化を避ける、等であった。
- ・自己評価基準：「自分では体を清潔にしているというが、体臭が強いこともある」など、自己評価と他者評価が異なる場合の評価基準についての意見や、「家族が金銭管理の一部を援助する必要がある人もいる」など、家族の力を借りても「できる」とするかなど、その人なりの評価基準を決めてはどうか、という意見であった。
- ・入力（自己評価）様式：言葉で評価するよりも5段階などの線で示す、評価の細かさも

カスタマイズできるとよい（3段階、10段階か）などの意見であった。

- ・出力（自己評価）様式：出力は表の方が分かりやすい、棒グラフが見やすい人もいる、などの意見であった。
- ・自己評価と他者評価のすり合わせ：「自信がない人は客観的にできていると思われても『できない』にするのでは」など、支援者や実習先の評価とのすり合わせが必要との意見があった。
- ・モニタリング頻度と期間：1時間おき、朝夕、1日1回が継続しやすい、などの意見であった。
- ・機能：他のアプリとの連動、読み上げ機能、などの意見があった。
- ・その他：鬱状態でアプリを立ち上げることもできない時の対処をどうするか、という意見があった。

表4 アプリ全体への意見

前提	自分のためのアプリと感じてもらえるようにする
----	------------------------

	自分で目標を立てて、そのためにつける 初心に帰る、目標を再認識できるもの 継続できる手軽な物にする
項目と構造	項目をカスタマイズできると効果的 手軽さが大事なので項目を絞る 自由記述があるとよい 行動や気持ちに関連しなくても環境のチェックができるようにする 最初に心身の状況を尋ねて、その背景や結果としての生活行動を聞く という方法もある 構造化すると難しい対象者もいるので、並列でつけるようにしてはどうか
自己評価基準	人によってできるレベルが異なるので、支援者と個別に設定してから 使用する その人なりの評価基準を決めてからアプリを使う（家族の力を借りても「できる」にするなど）
入力（自己評価）様式	言葉で評価するよりも 5 段階などの筋で示してはどうか 点数のほうが分かりやすい 数字や線で評価が良い 言葉の評価は難しい 評価の細かさもカスタマイズできるとよい（3 段階、10 段階か）
出力（自己評価）様式	出力は表の方が分かりやすい 出力は人によってグラフまたは表に変更できるとよい 棒グラフが見やすい人もいる 折線グラフが重なると分かりにくい人もいる 折れ線のほうが分かりやすい
自己評価と他者評価のすり合わせ	支援者と本人の評価をすり合わせる必要がある 自己評価と他者からの評価の食い違いをどうするか アプリで予め共有して、細かい点は対面で深めていく 支援機関、企業、本人とのギャップを埋めるために活用する
モニタリング頻度と期間	1 時間おきに気持ちや体調を記録する人もいる 毎日と帰りの状態を記入すると 1 日の変動が分かる 1 日 1 回程度の単純な方が継続できる 寝る前、朝など、都合のいい時間に 1 日を振り返って入力する 毎日は負担になるので気になるときに入力する モニタリングの期間を個別に設定する
機能	他のアプリと連動できるとよい 視覚や学習に障害がある対象のために読み上げ機能が必要である
その他	鬱状態でアプリを立ち上げることもできない時の対処

D. 考察

得られた意見について、研究班、及び、有識者と協議し、次のようにアプリ項目、及び機能について検討した。

1-1. 入力項目内容

個々の障害者の状況に合わせるために、全ての小項目について、下位の項目が必要に

なり、入力の負担が増えることが懸念される。各小項目に「メモ」機能で、個別性を保つ。例えば小項目「睡眠は足りている」には「睡眠についてメモ」機能をつけ、個別の状況に即して「夜11時に就寝する」「就寝前は、SNS は見ない」などをメモすることで、より自分のためのモニタリングとなるようにする。

1-2. 入力項目構造

生活行動、気持ち体調、環境に分類され、紐づく構造は、バイオ・サイコ・ソーシャル・モデルに準ずると考える(日本ソーシャルワーク教育学校連盟, 2020)。バイオ・サイコ・ソーシャル・モデル「状況のなかの人間 (person-in-his/her-situation)」として捉える点を重視し、バイオ (bio) / サイコ (psycho) / ソーシャル (social) という3つの側面からクライエントの状況や環境を把握する。バイオ (生理的・身体的状態) には、クライエントの有する健康状態や ADL・IADL の状態、能力などが含まれる。サイコ (精神的・心理的状態) には、クライエントの心理状態や意欲、意思の強さ、嗜好、生活やサービスに関する満足度などが含まれる。ソーシャル (社会環境的状態) には、家族や親族との関係、近隣関係、友人関係、住環境や就労状況、収入の状況、利用可能な社会資源などが含まれる。

バイオ・サイコ・ソーシャル・モデルでは、クライエントの置かれている困難な状況は、生理的・身体的要因、精神的・心理的要因、そして社会環境的要因がそれぞれに独立したものではなく、相互に関連し合い、複合的に作用し合って困難な状況をもたらしていると捉える。

本アプリの項目をバイオ・サイコ・ソーシャル・モデルと突合すると、生活行動はバイオ、気持ち体調はバイオとサイコ両者にまたがる項目、環境はソーシャルに含まれる。障害者の置かれている状況を相互に関連しあい複合的に作用しあうものという点でバイオ・サイコ・ソーシャル・モデルの考え方と合致し、包括的かつ相互関係で障害者の状況をモニタリングできる構造と考える。

2. アプリ全体への意見

・前提：「自分のため」と感じられるアプリとするために、アプリ起動時に「アプリをつける理由（働く理由）」をトップに示す。

また「継続しやすい機能」とするために、操作を単純にすること、項目数を絞ることが考えられる。

・項目と構造：項目数を絞る、自由記述を入れる、大項目のうち入力が抜けていても記録できる、という機能をつける。

行動・心身・環境を突合させることで、合理的配慮やナチュラルサポートの改善につながるため、構造化の機能は維持する。

・自己評価基準：アプリ活用を開始する時点で、支援者と評価基準を決める。例えば、「よく眠れた」の評価は、アプリをつける前と変わらなければ「どちらでもない」、アプリをつける前よりも朝の目覚めが良く日中も眠くならなければ「当てはまる」、アプリをつける前よりも眠れなくなった場合は「当てはまらない」とする、などが考えられる。

・入力（自己評価）様式：言葉、数字、顔の表示で分かりやすさと親しみやすさを考慮する。

・出力（自己評価）様式：視覚的に理解しやすい折れ線グラフとし、行動、心身の状態、環境の各1項目のみ（計3つのグラフが一つの枠に出力される）を出力できるようにする。

・自己評価と他者評価のすり合わせ：NIVR の「就労支援のためのアセスメントシート」開発の際も、自己評価と他者評価に食い違いが見られ、すり合わせをすることで相互の理解が進むとされていた(井口修一 et al., 2022)。本アプリも自己評価と他者評価のすり合わせながら、互いの理解を深めていくことが重要と考える。

- ・モニタリング頻度と期間：モニタリングは継続できることが重要であるため、頻回の入力を避ける。期間は、就労選択支援を視野に入れると1か月程度と考える。就労選択支援が終了し、一般就労、就労移行支援、福祉的就労に進んだ後も必要時継続して経過を追うこともできる。
- ・機能：調査対象となった障害者は、頭痛や睡眠、女性は月経前症候群など、単独のアプリを活用していた。他のアプリとの連動も視野に入れる必要がある。読み上げ機能は視覚障害者は既に利用しているので、それを活用できる。
- ・その他：障害者の支援のためのアプリであるため、負担をかけてまで継続する必要はないと考える。休養が必要な際は、休養を優先し、モニタリングしたいと意欲が出た際は再開するように、未入力期間は空白となるよう作成する。

3. 今後の示唆

アプリの効果的な活用には、個別化された情報提供と専門家の助言が重要といわれる(Shi et al., 2022)。〈就労アセスメントアプリ〉も、障害者の働く目的に応じて入力項目を選択し、支援者や就労先の職員と共に振り返りをすることが功を奏する。

また、アプリ利用の促進要因にアプリリテラシーがある(König et al., 2021)。アプリに親和性の高い年代が対象となると考えるが、慣れるまでは支援者と共に入力することも考えられる。

E. 結論

障害者本人の状態の波と支援環境を突合させて経過をモニタリングするための〈就労アセスメントアプリ〉入力項目候補の妥当性を確認するために、支援者27名、及び障害者

11名に、「障害者本人の状態の波を考慮して就労環境を調整するために、モニタリングが必要な項目」について聞き取り調査した。

個別性に即した細項目が必要、評価者のためのアプリではなく「自分のため」と感じられること、「継続しやすい機能」、その人なりの評価基準を決める、等の意見が得られた。

本アプリの入力項目の構造は、障害者の置かれている状況を相互に関連しあい複合的に作用しあうものという点でバイオ・サイコ・ソーシャル・モデルの考え方と合致する。

本アプリの目的から〈就労アセスメントアプリ〉という名称よりも〈就労生活モニタリングアプリ〉が妥当とも考える。

F. 健康危険情報
なし

G. 研究発表

1. 論文発表
なし

2. 学会発表

Marutani M, Usui C, Kawajiri H, Takai Y, Kawaguchi T
Support a reason for living of persons with disabilities using the mobile phone application. 3rd Edition of International Public Health Conference March 21–23, 2024, Singapore

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

- König, L. M., Attig, C., Franke, T., & Renner, B. (2021). Barriers to and facilitators for using nutrition apps: systematic review and conceptual framework. *JMIR mHealth and uHealth*, 9(6), e20037.
- Shi, Y., Wakaba, K., Kiyohara, K., Hayashi, F., Tsushita, K., & Nakata, Y. (2022). Effectiveness and components of web-based interventions on weight changes in adults who were overweight and obese: a systematic review with meta-analyses. *Nutrients*, 15(1), 179. https://mdpi-res.com/d_attachment/nutrients/nutrients-15-00179/article_deploy/nutrients-15-00179.pdf?version=1672390355
- Sullivan, A. N., & Lachman, M. E. (2017). Behavior change with fitness technology in sedentary adults: a review of the evidence for increasing physical activity. *Frontiers in public health*, 4, 222909.
- Szinay, D., Jones, A., Chadborn, T., Brown, J., & Naughton, F. (2020). Influences on the uptake of and engagement with health and well-being smartphone apps: systematic review. *Journal of medical Internet research*, 22(5), e17572.
- 日陰七重, & 鈴木純恵. (2008). 福祉施設に通う知的障害者の体調不良を発見するための方策. *大阪大学看護学雑誌*, 14(1), 21-28.
- 井口修一, 武澤友広, & 石原まほろ. (2022). 就労困難性 (職業準備性と就労困難性) の評価に関する調査研究-「就労支援のためのアセスメントシート」の開発. *調査研究報告書サマリー*, 2, 17-24.
- 岩本友規, & イワモトユウキ. (2020). 発達障害のある人の就労継続に向けた主体的な自己の発達. *明星大学発達支援研究センター紀要: MISSION*(5), 31-40.
- 日本ソーシャルワーク教育学校連盟, 一. (2020). ソーシャルワーク演習のための教育ガイドライン.
- 総務省. (2021). モバイル端末の保有状況. <https://www.soumu.go.jp/johotsusinto/kei/whitepaper/ja/r04/html/nf308000.html#n3801010>